——ヨハンナ・スピリ原作——

ハイデ

東京女子高等師範學校教授　津田芳雄譯

一、山を登つてアルム叔父さんの所へ

マイエンフエルトの古い落着いた村から、一本の小道が緣の野山をうねつて山の麓の方へ通じてゐる。それらの山は聳え立つ峯々から嚴かにこちらの谷を見下してゐる。道は登るにつれて段々嶮しくなり、やがて短い草や頑丈な高山植物の好い香がして來る。この邊からはもう直ぐ頭の上のアルプスの峯々に通ずる山道である。

或六月の晴れた朝、背の高い元氣さうな山邊の娘が小さい女の子の手を引いてこの山道を登つてゐた。小さい子の頰はその日焦した黑い顏にもそれと見える程に赤くほてつてゐた。それも無理はない。この暑い時に、まだ七つそこ〳〵の子供が眞冬の寒さでも防ぐやうに厚着をさせられてゐたのだから。だがその七つといふことをその姿格好から判斷することは一寸六かしかつた。三枚までではゆかないが二枚は確かに着物を重ねて居り、その上に又厚地の赤い毛のショールを掛けてゐたものである。その無恰好な姿が小さい足を厚皮の山靴に入れてコツ〳〵と暑い中を登つてゐた。

二人はものゝ一時間も登つた頃、アルムといふ大きな山の中腹に在る小さい村に着いた。この村はイム・デルフリ(小村)と云つて、大きい方の娘の生れ故郷であつた。それでその家からもその家か

らも挨拶をされ、窓から、戸口から路の上からと呼びかけられたものだつたが、娘は歩き乍ら答へるだけで、村の端れに着くまでは足を停めなかつた。村端れに來るともう小さい家が二三軒ぽつり〳〵あるだけである。その一番端れの家から「デーテ、ちよいとお待ち。もつと上に登るのなら妾(ワタシ)も一緒に行くわ」と呼ぶ聲がした。

娘が呼んだ人を待たうと立止ると、小さい子は娘の手を放して直ぐと地べたに坐つた。

「ハイデ、疲れたの?」と娘のデーテは尋ねた。

「いえ、でも暑いの」と小さい子は答へた。

「あなたが大きく歩いて、一生懸命に登つたらね、もう一時間で登りつくわよ」とかう云つて大きい方の娘は小さい連れを元氣づけた。

家からは達者さうな快活な女が出て來て、二人に加つた。小さい子は立上つて大きい人達の後からぶらり〳〵と從いて行つた。大きい人達は直ぐに近所の親しい人達や村の人達の噂話を始めた。

「それはさうとデーテ、あなたはこの子を何所へ連れて行くの?この子は亡くなつたあなたのお姉さんの子でせう」と新な連れは尋ねた。

「さうよ。で、アルム叔父さんの所へ連れて行つて、其處に殘して置くの」とデーテは云つた。

「まさか、アルム叔父さんの所へ行くなんて正氣の沙汰ぢやないわ。屹度あの人、あなた達を追ひ返して、あなたの云ふことなんて聽きやしないよ。」

「だつてこの子のお祖父(ヂイ)さんだもの、何とかしてもらはなくては、妾(ワタシ)は今までこの子の面倒をみて來たでせう。ね、バーベル、妾はこの子の爲に好い奉行口をふいにしたくないわよ。今度は叔父さんの番よ。」

「それがね、普通の人だつたらいゝけど。あんな人つていふこと、あなただつて知つてるでせう。

それにこんな小さい子を、あの人にどうすることが出來ませう。この子だつてゐたゝまらないわ。でも、あなたは何所へ奉行に行くつて？。」

「フランクフルトの立派なお屋敷よ。去年の夏その家の方がラガッツ（溫泉場）にいらつしてね、妾がそのお部屋の掛だつたの。妾がお氣に召して、その時連れて行きたいが來ないかつて云はれたけれど、出られなかつたの。今年又いらつして、勸められたから行くことにしたわ。」

「まあ、妾、この子でなくて好かつた！」バーベルは身震し乍ら云つた「あの叔父さんと來たら山の上でどんなことして暮してゐるかわからないからね。誰とも物は云はないし、一年中教會には近附かない。たまに山を下りて來た時はみんなが避けるしさ。一人で會へる人なんか無いんだよ。太い白い眉毛や、無氣味なでかい顎鬚を生やして杖をついて來る所はまるで昔の異教徒か蕃人みたいに恐いからね。」

「そんなこと妾の知つたことぢや無いわよ。叔父さんはこの子を苛めはしないさ。苛めたつて、それは叔父さんが惡いので、妾は知らないよ。」

「叔父さんは何か氣を咎めるのだらうね。どうしてあんなに眼が凄くて、山の上に獨で住んでゐるのだらうね。誰も訪ねて行つた人は無いし、色んな妙な噂があるが。デーテ、お姉さんから何か聞いてゐない？。」

「それは聞いてゐるさ。だけど默つて置かう。でないと叔父さんから怒られて困ることになるからね。」

バーベルは前々からアルム叔父さんのことを詳しく聞きたいと思つてゐた。アルム叔父さんはどうしてあんなに人を憎んでゐるやうにして、獨りぼつちで暮してゐるのか、どうして世間の人達は、叔父さんの惡口を云ふのは恐いが叔父さんを好く

は云ひたくないと云つたやうに、ひそ〳〵聲で叔父さんの噂をするのか、バーベルには解らないのであつた。それにデルフリの村の人達が皆あの人をアルム叔父さんと呼ぶのはごういふ譯だらう。みんなの叔父さんなんてことはある筈はない。けれどもみんながさう云ふのでバーベルもさう呼んでゐるのだつた。彼女は數年前にこの村に嫁に來た者で、それまでは下の方のプレティガウといふ村の人であつた。それに引きかへデーテの方はこの村の生れで、去年母親が亡くなつてから、ラガッツ溫泉場の大きいホテルに女中奉行をしてゐるのであつた。今朝彼女は遙々ラガッツからこの子を連れて、マイエンフェルトまでは枯草馬車に乘せてもらひ、此所までやつて來た所であつた。それでバーベルにしてみれば得難い機會である。彼女は親しさうにデーテの腕を把つて云つた「ねえ、あなたにはこの噂の本當のことが分つてゐるでせう。叔父さんにどんなことがあつたの？前からあんなに人から避けられ、叔父さんの方でも前から人を嫌つてゐたの？聞かしてよ。」

「前からどうであつたか、そんなこと分らないわ。叔父さんは七十になり妾は二十六だもの。だけど、妾の話すことがプレティガウ中に分つてしまふのでなければ色々話してもいゝわ。妾のお母さんもあの叔父さんもドムレッシュから來た人なの。」

「ひどいよ、この人。プレティガウはそんなに人の噂をしない所よ。妾だつて喋つてならないことは喋らないわ。」

「ぢや話すわ」と云つて、しかし子供が直ぐ後についてゐて、聞いては惡いと思つて振返つて見ると、子供が見えない。二人が話に夢中になつてゐる間に何處かで道から外れたらしい。デーテは立止つてあちこち見廻した。道は所々曲つてはゐる

が殆んどデルフリまで見通しが利く。けれども道には見えない。

「あー、あそこにゐるわ。あれ御覽」とバーベルが道から大分離れた所を指し乍ら呼んだ。「山羊を連れた山羊飼のペーテルと一緒に登つてゐるのね。今日はペーテルどうしてあんなに遲いだらう。だけど妾達には都合が好いわ。ペーテルに委して置けばあの子は間違無いし、あなたは邪魔がなくて話が出來るからね。」

「お守の方は心配ないわ。あの子は七つにしては、眼がよく利いて賢い子だからね。小屋と山羊二頭しかない叔父さんには今に調法な子になるわよ。」

「あの叔父さん、前にはもつとあつたの?。」

「それはさうともさ。ドムレッシュでは一番の畑持だつたんだからね。だけど若い時に贅澤を覺えて、酒と遊びに何もかも失くしてしまつたのさ。叔父さんの親達はそれを悲んで亡くなつてね、叔父さん自身も村から姿を消したんだつて。それからずつと後になつて、大分大きくなつた男の子を連れてひよこつり歸つて來てさ、その子を何所か親戚に預けようとしたけれど誰も相手にしない。それに色々惡い噂も擴がつたさ。それで叔父さんは怒つてしまつてね、もうドムレッシュには住まないと云つて、その子を連れてデルフリに來たんだつて。その子はトビアスと云つて後で大工さんになつたが、おとなしい、しつかりした人だつたつて。デルフリでは家のお母さんのお祖母さんが、あの叔父さんの從姉に當るので、家と親類附合をすることになつてね、家のお父さんの方からいふと村の殆んど全部の人が緣になるので、村の人達もそれから叔父さん〳〵と云ふやうになつたんだつて。そしてアルムの山に住むやうになつてまたアルム叔父さんと云ふやうになつたんだつ

て。」

「そしてトビアスさんはどうなつて?」熱心に聽いてゐたバーベルは尋ねた。

「ちよつと待つてよ。今その話をするから。だけど一度に何もかもお話し出來ないわ。」デーテは叫んだ。「トビアスはね、メルズで大工さんの修業をして、一人前になつてから村に歸つて來て、姉のアデライデと結婚したの。二人は何時も仲が好くて、とても幸福な夫婦だつたわ。でも、その喜びは短かくてね。二年後に、トビアスは或うちの家を建てゝゐる時に、梁が落ちかゝつて來て死んでしまつたの。姉さんはびつくりしてね。かねてから弱くて、その發作が來た時には目が覺めてゐるのか、眼つてゐるのか分らんやうな妙な持病があつたのだが、たうとう夫が亡くなつて二月目には姉さんのお葬式が出ることになつてしまつたのよ。

「世間ではこれは叔父さが不品行であつた天の罰だと云つてね、叔父さんに面と對つてさういふ人まであつたの。叔父さんはその後は誰とも一切口をきかなくなつて、あんなに教會と世間の人に背いて山の上に引越してしまつたの。

「お母さんと妾はアデライデの二つになる赤ん坊であつたこのハイデを引取つてさ、お母さんが亡くなつてからは、ラガッツに連れて行つて、妾が金を出して人に預けてゐたのよ。だけど去年いらつしたフランクフルトのお客さんが又この春いらつしてさ、是非來いと仰有るもので、明後日行くことにしたわ。とても好い口よ。」

「それでこの子をあの恐い叔父さんに渡す積りなの?デーテ、どうしてそんなことが出來るでせう!」バーベルは責めるやうに云つた。

「だつて妾はもう妾の義務を果したと思ふわ。フランクフルトへ連れては行けないし、何處へ連れ

て行くの？所でバーベル、あなたは何處へ行くところ？もうアルムの山を半分登つたわ。」

「あ、恰度着いた所だつた。この家に冬の糸紡を頼む用があつたの。ではさよなら。御機嫌好うね。」バーベルはさう云つて、道傍（ミチバタ）の窪地に在る小さい媒けた山小屋の方へ行つた。

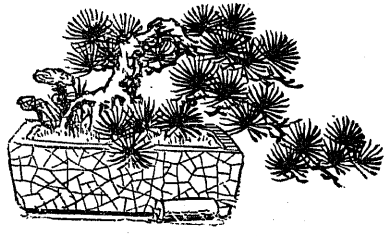
この山小屋といふのはひどい家で、デルフリから丁度アルムの中腹位の所に當るので、窪地にでもなければ、風の强い時には簡單に下の谷に吹き下されさうだつた。こんな窪地に在つてさへ、少し風の强い日にはガタ〳〵ギー〳〵と大變であつた。

これは山羊飼の少年、十三歳のペーテルの家であつた。彼は毎朝デルフリまで下りて行つて山羊を連れて登り、上の山でおいしい山の草を食（ハ）ますのであつた。それから夕方になると又デルフリまで跳んで下りて、そこで指の間からピューッと口笛を鳴らす。すると山羊の持主達が名々の山羊を取りに集つて來る。この集つて來るのは大抵小さな男の子や女の子であつた。山羊はやさしくて恐くないので。この時がペーテルが長い夏の日に、他の子供達と遊ぶ唯一の機會であつた。毎日の他の時間は山羊が相手である。家には尤もお母さんと盲目のお祖母さんがあるが、家では簡單な朝晩の食事をする時間があるのが精々。あとは寢床にもぐり込むだけである。それで彼は出來るだけ長くお友達と遊ぶことが出來るやうに、何時も朝は早く家を出て夕方は遲く歸つた。彼のお父さんは數年前に木を伐つて居る時に怪我をして死んだ。お父さんも「山羊飼のペーテル」と云はれてゐた。お母さんのブリギッタも「山羊飼ペーテルのお神さん」と云はれた。盲目のお祖母さんはその邊一たいの若い人、お年寄にとつて一樣に「お祖母さん」であつた。

デーテは十分位立止つて、子供達と山羊が登つて來るのを見附けようとあちこち眺めてゐた。けれども一向に見えない。それで彼女はもつと見晴の利く高い所に登つて、愈々心配な樣子を見せて、あたりの斜面を眺め續けた。

一方子供達は、ペーテルが山羊の好い食物のある所を知つてゐて、道を眞直には山羊を連れて登らない習慣だつたので、あちらに外れ、こちらに廻りして登つてゐた。小さいハイデは暑さと鎧のやうな着物に大分參つて、はあ〳〵云つてゐたが、それでも一生懸命ペーテルの後について、何とも云はなかつた。けれどもその小さい目は、輕い短いずぼんをはいて跳び廻るペーテルや、それよりも樂に岩や藪を跳び越えたり嶮しい坂を駈け上つたりする細い脚の山羊を、始終見てゐるのだつた。いきなりハイデちやんは地べたに坐つた。そして小さい指で大急ぎに靴と靴下を脱いだ。それから立上つて赤い肩掛を投げ捨て、着物を一枚脱いだが、まだその下に着物がある。デーテが持つて行く面倒を省く爲に晴衣（ハレギ）の下にふだん着を何枚か着せてゐるのであつた。が忽ちそれらの着物も脱いで、輕い袖の短い下着だけとなつて、ハイデは喜んで小さい手を差伸した。それから脱いだ物を一所（トコロ）に積んで置いて、ペーテルと山羊の後を元氣好く追つて行つた。ペーテルはハイデが後に殘つた時に、何をしてゐるか氣をつけてゐなかつた。がこの時ハイデの姿を見て笑つた。ふり向いて地面にある着物の積んだのを見ると益々笑つた。けれども何とも云ひはしなかつた。

ハイデはもう樂に歩けるやうになつたので、ペートルと話を始めた。「山羊は何匹ゐるの」とか「何處まで行くの」「そこへ着いたらどうするの」とか色々なことを訊いてペートルに答へさせた。暫くして漸く二人は例の山小屋の所へ來て、待構へて

るたデーテに見附かるこ、デーテは大きな聲で「ハィデ、何してゐたの？まあ何ていふ姿でせう。着物や肩掛はどうした？買つてやつた新しい靴も、編んでやつた靴下もないぢやないの？なに考へてゐたんでせうね、ハィデ！着物やなんか皆何處へ置きました？」

ハィデは落着いて下の方の或一點を指さして「あそこ」と答へた。デーテは指さゝれた方向を見るこ、地面に何かわづかに見える。その上に赤い點が見えるのは確かに毛の肩掛らしい。